

挿絵：しらしら8  
島津六

# 夜淫

女捜査官コスプレ 処女航海

# 航路



試し読み版

リアルドリーム文庫



Contents

目次

第一章	演ずるをいとわず	4
第二章	獣欲の包囲	30
第三章	パニーの哭く夜	75
第四章	淫獄への入り口	140
第五章	奉仕と強姦の狭間で	199
第六章	波間に消える白い肌	258

## 登場人物

Characters

### 芹澤 静海

(せりざわ しずみ)

潜入専門の女捜査官。男を骨抜きにする美貌と巨乳でターゲットの油断を誘う。正義感が強く、犯罪の根絶のためならば自己犠牲をもともしない。

### 司馬 龍

(しばりゅう)

バブル時代から私財を肥やしてきた肥満体系の老人。ビジネスマンとしての顔とは別に、中華マフィアとしての一面も持っている。

### 司馬 慎

(しばしん)

司馬龍の一人息子。親の威光をかさにきて豪遊する日々を送る。



## 第一章 演ずるをいとわず

—

「本当にこんな派手な服を着なければいけないのかしら」

変装用に用意されたターコイズブルーのドレスを前に、女はそう呟いた。

切れ長の眼を彩る、形よくカーブした眉がかすかにひそめられている。

その高い鼻筋とシャープな顎あごのラインとが、怜悯れいりな美しさを彼女に与えていた。知的に引き結ばれた唇と透明感のある頬は、どこかビスクドールめいた雰囲た気を湛たえている。首筋で揺れるショートの黒髪はボーイッシュな印象だが、襟足に伸びる白い首筋がなんとも艶なまめかしい。二十代半ばと思しき容貌おぼには、若々しさとともに成熟した女の香りが混じり合っている。

(でも、こういう格好がああの男の趣味ならば、それに乗るしかないわね)

そうして自分を納得させると、パンツスーツ姿の彼女は上着からブラウスの順に着

衣を脱ぎ去っていく。健康的な白さの肌をあらわにしたその上半身は、ベージュのブラジャーを着けているのみである。

百七十センチ近い長身はすらりとしてスリムだが、地味なデザインのブラジャーに包まれたバストのサイズはFカップである。ウエストはしなやかにくびれており、ペタンとした腹部に刻まれたヘソのくぼみが愛らしい。たおやかな上半身の中で、乳房だけがむっちり張り出した様子が、信じ難いほどにエロチックだった。

上を脱いでしまった女は、ベルトに続けてパンツのホックも外す。つんと上を向いたヒップからするとパンツを下ろすと、中に穿かれてはいるのはブラジャーと同色のパンティである。地味なデザインだが、魅肉の張り詰めた彼女のヒップにわずかにゴムの食い込む様はなんともセクシャルである。

下着のみの姿で、改めてドレスを手にした。床に引きずるほど長いスカート部分に苦心しつつ、ドレスのウエスト部にその長い足を差し入れる。彼女の膝が胸元近くまで上げられると、柔らかく肉をまとう太腿ふとももがむにと変形した。

足を通したドレスを引き上げて、袖ぐりに腕を通す。ドレスの上半身はV字に仕立てられており、胸元と背中に加えて腋窩えきか部分も大きく開いている。

「これじゃあ下着も丸見えじゃない……みつともないわ」

中に着けたブラジャーは中央部分も背面部分も大きく露出している。さらに、大きく尻に向けて切れ込んだドレスの下部ではパンティの上端すら見えている状態だった。ワンピースタイプのそのドレスは下半身に大きくスリットが入っており、そこから覗く女の尻肉はこぼれんばかりの様相を呈している。スリットから覗く太腿にパンティのゴムが食い込んでおり、実に生々しい官能美を醸し出していた。

「とりあえず、あとは仕上げだけね」

女は足元に置かれたバッグからネックレスやブレスレットといったアクセリーを取り出すと、手際よく身に着けていく。さらに、緩くカールしたブロンドのウィッグをかぶり、ヒールが十センチ以上あるサンダルを履いた。

一通りの身なりを整えた女は姿見の前で己の姿を検分する。

（やっぱり下着が見えているのはみっともないわね。かと言って、恥ずかしがって任務を失敗するなんてもつてのほか……あの男に正義を執行するには、こうするしかないわ）

彼女は再び自分に言い聞かせると、上下とも下着を脱いでしまった。そして、改めて姿見に身体を映した。

そこに立つのは妖艶な衣装を完璧に着こなすホステスである。

彼女の名は芹澤静海。せりざわしずみ

警察組織に属する捜査官である。しかし、彼女の業務内容は、一般の刑事とは少々異なっていた。

その美貌を生かして、女にしか出来ない捜査を行うのが彼女の任務なのだ。女性が相手であれば、悪人も油断して懐はに入れてしまうこともある。

女の特権をフルに使った芹澤静海の潜入捜査が、これから始まるうとしていた。

## 二

タキシード姿のスタッフと酒を運ぶボーイとに挟まれて、静海は絨毯じゅうたんの上を進む。ここは政財界の人間や由緒ある名家の人々がひっそりと利用する会員制の高級クラブだった。

卓の並んだ広いラウンジで客が歓談する通常のクラブとは異なり、閉ざされた各々の個室で会員たちが会談をし、取引を行うのが、このクラブのスタイルである。

そして、そこには犯罪に関わる密談も存在するのだ。

(胸もお尻も落ち着かないわ)

ドレスのバストには布が当てられていたので、乳首が浮くことはない。しかし、歩きたびにゆっさゆっさと揺れる乳肉の存在が気分を不安にさせる。さらに背中側が大きく切れ込んだデザインのドレスでは、尻の谷間まで見えてしまいそうだった。

しかし、静海には女性的な羞恥心に拘泥している余裕はない。これから臨む任務の前に、集中を乱すわけにはいかないのだ。もとより、潜入捜査のために己の精神を律する訓練は受けている。静海は心を平静に保つべくゆっくと深呼吸をした。

とある部屋の前で足を止めたスタッフが静海に小さく頷く。それまで人形めいた無表情でいた彼女は柔らかな笑みを作った。それだけで彼女の美貌はいっそう華やいで見える。そして、静海は完璧な営業スマイルのまま部屋の戸をノックした。

「お待たせしました。杉本様」

部屋の主である杉本という男が、彼女の今夜のターゲットである。

ノックする静海の挨拶が終わらぬうちに扉が開かれた。中から姿を見せたのはごつ



い黒服の男である。恐らく彼は杉本のボディガードだろう。

「おう、早く早く」

そして、黒服の向こうから、中へと招く声が聞こえる。静海は黒服に会釈をすると扉を潜った。

「失礼します。カズミです」

入り口で源氏名を名乗り、深々と頭を下げる。前で揃えた両手は、静海のバストを大きく盛り上げる効果を狙ったものだ。室内から伸びる視線がドレスの胸元に突き刺さるのが痛いほどに感じられる。

そして、たつぷり五秒間が過ぎてから、ようやく彼女は頭を上げた。

(護衛も入れると四人……取引相手とのサシじゃあないのね)

早速静海は室内の人数を把握する。どうやら想定外のオマケがいるようだ。

中央の大きなテーブルにはすでに酒肴が並んでいた。そのテーブルを囲むようにして四方にソファが置かれている。入り口と対面する一番奥のソファにかけた六十年配の男が杉本だった。脂ぎった濃い顔立ちもさることながら、てらてらとした禿頭も、でつぷりとシャツを押し出す腹も、彼の外見を構成する全ての要素が、如何にも狒々

親父といった様相を演出している。

国会議員である杉本は、その立場を利用して非合法的な裏取引や情報漏洩で私腹を肥やしていると目されていた。そして、静海たち捜査班は幾つもの情報や事前調査を経て、彼が今日この場所でなんらかの違法な取引を行うことを突き止めたのである。

その取引相手が、入り口から見て右手側のソファにかけているスーツ姿の王<sup>ワン</sup>という中国籍の男だった。こちらは福々しく中年太りした四十代で、杉本の選挙区で大きく業績を伸ばす中国企業の社長である。

（王の会社の発展に杉本がどう絡んでいるのか……）

静海はターゲットである男たちを前に、営業スマイルの陰で思考を巡らせる。

（それにしても、あっちの男は見たことのない顔ね）

彼女の視線の先、王の正面に座るのは、百戦錬磨の中高年である杉本と王に比べて、明らかに格の落ちる容貌の男だった。野暮<sup>ぶ</sup>りたい眼鏡をかけた小太りの青年である。二十五歳の静海と同じか、やや上くらいの年齢ではなからうか。細い眼には力がなく、口元もだらしなく半開きである。まるでこの場に相応<sup>ふさわ</sup>しい人物に見えないが、もしかしたらどこかのIT企業の社長かも知れない。ほかの二人とは違い、パーカにジーン

ズという装いである。静海はとりあえず、正体の知れぬ眼鏡男を思考から締め出すことにした。いま彼女が考えるべきは、任務の第一段階についてである。

(取引内容を確実に押さえるために、まずは盗聴器を仕掛けないと……)

タキシードとボーイが去り、静海が一人残された。個室に一步踏み込んだ女捜査官に、金属探知機を持った黒服が近寄ってくる。恐らくはそうした装置によって、すでにこの部屋自体も十分に検査されているはずである。だからこそ、いまから仕掛けられようとしている盗聴器に対して、杉本側にも油断があるのだ。

探知機を構える黒服に、営業スマイルを向けた静海は軽く両手を広げてみせる。

彼女の身体の上を探知機が移動していく。もちろんアクセスサリーをじゃらじゃらとぶら下げているので、ピーピーとやかましく信号音が鳴っている。そのたびに美しいホステスは原因であるアクセスサリーを黒服に示してみせる。

ところが、入り口でのそんなやりとりが待ちきれないとばかりに杉本はソファから立ち上がると、静海に向けて大きく手招きをした。

「そんなもんは後回しにして、はよこつちに来い。えらいべつびんじやないか！」

その言葉に黒服が動きを止める。雇い主のそういつた我がままには慣れっこなのだ

ろう。彼は探知機を持ったまま壁際に身体を引くのだった。

(渡りに船かしら。向こうからハードルを下げてくれたわ)

盗聴器は静海の履く厚底サンダルのヒールに隠してある。アンクレットとともに金属の装飾品で固められたサンダルは、金属探知機を誤魔化すのに有用なのだ。その小細工が取り越し苦労に終わったことに内心で安堵しつつ、静海は上座にある杉本のソファまでしゃなりしゃなりと歩みを進めた。

「ほれ、はよ座れ」

老境に入りつつあるエロ議員が自分の太腿をばんばんと叩く。

「では失礼します」

軽く頭を下げた静海は、躊躇せず<sup>ちゆうちゆう</sup>に彼の左の太腿に腰を下ろす。屈辱的な要求でも即座に受け容れねばならない。彼をいい気分にさせて油断させておけば、より任務が果たしやすくなるだろう。

老人の股座に両足を収めるようにして座ると、でっぷりとした中年太りの太腿は醜く弛んで美人ホステスの尻を受け止めた。

「おうおう、いい尻ぞ」

自分の太腿に乗った美女のヒップに、杉本が目を細める。左からは、王がへつらいの笑みを向けている。

「お客様、お酒はどうなさいますか」

あざとい仕草で静海が小首を傾げると、老人は下座の眼鏡の青年に手を振った。

「坊、適当に注いで適当に飲んでなさい」

（坊……どこかの御曹司？ 杉本や王の息子ではないわよね）

やはり彼女のデータベースには該当する存在のない男だった。ちらりと視線を送ると、彼はどこか不貞腐れたような様子で、ウイスキーのボトルを手にしている。

「ほれ、お前はそれを飲ませてくれ」

杉本はそう言うのと、促すように左手で静海の腰を抱いた。囚われのホステスは即座に眼鏡男から視線を移す。杉本の言葉が示すのは、卓上に置かれたグラスだろう。隣のボトルから判断すると、中身は日本酒のようだ。

「はい。ただいま」

グラスに手を伸ばすと、腰を抱く杉本の腕がウエストに深く食い込む。半袖の腕から伝わるねっとりとした素肌の感触がひどく不快だった。腕が伸びるのに合わせて大きく露わになった静海の腋窩部を眼鏡男が向こうから凝視している。

「どうぞ、杉本様」

恭しい仕草で手にしたグラスを杉本へと差し出す。太腿の上という不安定な場所であることに加えて、グラスの中にはそれなりの量の酒が入っている。バランスを保つのに一苦労だった。だが、グラスを前にした老人は口を開くでもなく、なにかを問うような視線を静海へと向けてきた。その仕草の意味が分からず、女捜査官の胸裏にかすかな緊張が生まれる。しかし、それを態度に出すわけにはいかない。咄嗟の判断で、あえて初心なホステスを演じることにする。

「杉本様、私、なにか粗相でも……」

すると、困惑の芝居を打った静海の横で王がこほんと咳払いをした。ついで、囁くような声が聞こえる。

「カズミさん。まずは貴女の口の中に含むのです」

その言葉の意味に気付き納得するまでに、わずかの時間を要した。あまりにも下卑た嗜好に思えたからである。だが、杉本の振る舞いからすれば恐らく間違いないだろう。静海は心の中で何度目かの溜息を吐くと、グラスに口をつけた。

（なんて下らないことを考えるのかしら。でも、任務のためだわ）

この捜査によって正義が執行され、社会がよりよい方向に動くのだ。そう心に言い

聞かせ、グラスの酒を口に含む。上質な日本酒らしく非常に滑らかな口当たりで、柔らかない芳香が鼻腔を抜けた。そのまま、結んだ唇を杉本へと近付ける。視界の隅に、グラスを手にぼかんとした表情でこちらを見る眼鏡男の姿が映った。

「うはは、賢い女ぞ。どれ、頂くとするかの」

だらしなく笑み崩れた杉本の唇が、静海の唇に重ねられた。生温かく加齢臭を帯びたキスに、胸の中が不快感と屈辱感でいっぱいになる。

しつかりと結び合っていることを伝えるように、エロ議員の右手が美女の後頭部に添えられた。万一にもウィッグがずれるのを恐れた静海は、すぐさま口中の酒を中年男の口腔へと送り込む。

「んっ、むっちゅ、じゅる」

自分の口元から聞こえる水音が堪らなく屈辱的だった。そして、美人ホステスの口中の酒を全て受け取ると、杉本は満足した様子で唇を離す。静海の艶やかな唇と、老人の色の悪い唇の間に銀色の唾液がアーチを描いた。

（まったく、信じられない下劣さね。必ず悪事を暴いて正義を下してやるわ）

早くこの場を去って口内を綺麗にしたいくて堪らない。だが、エロ議員の下卑た趣向は終わらなかつた。静海の後頭部に当てられていた彼の右手が、グラスを持つ彼女の

手を上から掴んだのだ。

「ほれ、返杯ぞ」

そして、グラスを傾けると、中の酒を自分の口に含んでしまった。酒の残滓で唇を汚した老人は小さく顎をしゃくって静海にアピールしてみせる。呆れ返る思いを隠して、女捜査官は媚笑を浮かべた。

「ご馳走になりますわ」

そして、自らエロ議員に唇を合わせた。彼がそうしたように、今度は静海は相手の頭に手を回す。ねっとりとした脂ぎった髪感触に鳥肌が立つ。同時に杉本の口内から酒が送られてきた。

「あつ、んむ、うつく、つくん」

小さく声を上げつつ、男から注がれる日本酒を受け止める。薫り高い高級純米酒も、老人の唾液を添加されては泥水同然だった。生臭く歪められた酒精が静海の咽喉を焼いて胃の腑へと流れ落ちていく。

「ちゅぶ、んっちゅ、はむう」

酒を飲ませ終えても老人の唇は離れなかった。それどころか静海の口腔に舌を挿入してくる始末である。明太子のようにぶよぶよとした物体に菌列をなぞられる嫌悪感



に、美女の鳥肌は収まる気配もない。

(いつまで続ける気なの！ 息がもたない)

不自由な姿勢では上手く鼻呼吸が出来ず、息苦しさがつのる。しかし、女捜査官の唇を貪る老人は、空いていた右手を彼女の胸元へと差し入れてきた。

「ちゅぶ、んっ！」

ノーブラの乳肌に触れる脂ぎった指は、まるでその過程を愉しむかの如く、ゆつくりと美女の魅肌を這い進む。その動作がさらに鳥肌を加速させる。

(これじゃ、乳首が立つってしまうわ。絶対に変な誤解をするわよね)

万一にも快感による勃起などと思われては屈辱極まりない。

そして、乳房の丸みを確認するように静海の肉体を侵犯する老人の指先が、いよいよ彼女の乳輪に到達した。ほんのりと小さな彼女の乳輪もまた、鳥肌の影響で隆起している。そのしつとりとしつとも硬質な感触を味わい尽くさんとばかりに、杉本の中指が二周三周と乳輪をなぞって円弧を描く。

(さつさと触って終わりにすればいいのに)

執拗に乳輪を廻り続ける指先にうんざりする。しかし、それを察したかの如く、杉本の中指が、腹の部分ですくうようにして静海の勃起乳首に触れたのだ。

「んっ」

さすがに敏感な器官への接触は、冷徹な女捜査官をして反応を抑えきれぬものではなかった。左の乳房から流れるかすかな牝の感覚に背筋を震わせてしまう。

「ほう、乳豆をくりくりと勃起させおつて、この女、なかなかの好き者ぞ」

ようやく唇を離れた老人が嘲るようにそう言った。否定の言葉を叩き付けたい気持ちを堪えて、蕩けるような営業スマイルを向けてやる。

「そんな、恥ずかしいですわ」

嫌悪感を堪えつつ身を振よらせると、杉本の手の中で静海の麗乳が形を歪めた。甘く柔らかなバスの触感に老人はだらしなく笑み崩れる。

「うはは、大きさといい肌触りといい、実によい乳ぞ」

（勝手なことを言つて。でも、またあの調子で飲まされたらまずいかも知れないわね。アルコールはアルコールだし、酔っ払ったら元も子もないわ）

事前に酒酔いの薬も服のんでいるし、牛乳を飲んで胃粘膜を保護してもいる。だが、日本酒である以上、それなりにアルコール度数は高い。いざ盗聴器を仕込む段階で手元が狂ってしまうこともあるかも知れない。

「ほれ、どうした。もつとよがって見せんか」

「あつ、そんな、お戯れを」

一瞬でもほかのことを考えたのがバレたのか、杉本がわっしわっしと力強く乳肉を捏ね回し始めた。中指と親指で乳首を保持しつつ、他の指で乳肌を揉むという高度なテクニクに、静海は本気で腰を震えさせてしまう。

「ふはは、腰をくねらせおつて。感じておるのか！」

上機嫌の杉本は、静海の腰に回していた左手を、スリットの狭間から覗く太腿へと移した。青く煌くドレスよりもさらに神々しい白磁の肌はくじに、老人斑の浮いた手がべたりと張り付く。芋虫のような指はいやらしく蠢きつつ、魅脚を這いずり回る。

（このまま隙を突いてこの老人に盗聴器を仕込めないかしら）

しかし、部屋の隅からは黒服が視線を向けているはずである。盗聴器を取り出して、さらにそれを杉本に仕込むという二つの行動は、さすがにバレてしまうだろう。

「なんと堪能らん触り心地の肌ぞ。愛いのう」

太腿とて鳥肌に覆われているのだが、杉本は気にならないらしい。任務を果たすべく思考を巡らせる静海の内腿をずるりずるりと撫で回す老人は恵比寿顔である。

やがて彼の手のひらが、徐々に太腿の内側から足の付け根へと遡上し始めた。盗聴

器を如何に仕掛けるかを考えていた静海は、はたと我に返る。

(しまった、いまは下着を穿いていないわ)

さすがに、陰部を触れられるのは抵抗があった。思わず老人に撫で回される両足を閉じてしまう。ところが、乙女の太腿によつてその手をサンドイッチされたエロ議員は、その感触に大喜びである。

「うははっ、よいのう！ 女の太腿の柔らかさときたら！」

そして杉本は静海の太腿の峡谷に左手を出し入れさせ始めた。明らかにセックスになぞらえたその仕草に、さしもの美人ホステスも営業スマイルを歪ませてしまう。

美女の太腿の狭間を泳ぐ杉本の手は、柔肉の海を掻き分けながら着実にその源流たる箇所へと向かっている。締め付けて動きを止めようと試みても、ほっそりとした静海の足ではそれもままならない。ついに内腿の上端付近の敏感な肌に、エロ議員のぬめる指先を感じた。緊張に鼓動が早くなる。

「ん、おお、これはっ」

驚きの声を上げる杉本に、テーブルの向こうで眼鏡男が首を伸ばした。

「ふはは、こいつはいい！ 準備万端だったか！」

はしゃいだ声を上げる老人の指が、静海の陰部に触れていた。彼女の陰毛を指で挟

んで、その繊細な肌触りを愉しんでいる。

「んっ、杉本様、それは、あっ」

陰毛を引っ張られる感覚に、小さく声が漏れてしまう。逃げるように腰をずらすが、杉本の手はその後を追うように股間へと潜り込んでくる。それでも性器への接触を厭う本能は無意識に腰を引いてしまう。

美しいホステスが老人の足の上で悶えるように腰をくねらせる様子に、眼鏡男と王がごくりと唾を飲み込んだ。

「御前、どんな下着だったのです」

ドレスの中でエロ議員の手が蠢く様子に我慢しきれなくなったのだろう。王が横から口を挟んだ。

「うははっ、自分で見て確かめてみい」

「あ、あのっ、杉本様っ」

杉本の言葉に、背筋が冷たくなる。

老人の右手が静海の右膝を裏から押し上げ、彼女の身体を王のほうへを向けた。その細い眼に好色そうな光を湛えた王が、ぐっと身体を乗り出す。一方、眼鏡男は移動すべきか否か迷うようににもじもじと腰を動かしている。

「ほれ、王に見せてやれ」

膝で静海の尻たぶを左右に割るようにしながら、杉本が耳元で囁く。同時に、大きく開いた左右の袖ぐりから彼の手がドレスの内側へと侵入を始めた。如何に任務とあつても、さすがに杉本の要求に躊躇ためらいを感じ、静海は困惑の言葉を紡ぐ。

「見せてって、それは、あの」

「どんな下着か知りたいと言つておつたぞな。お前が自分で見せて教えてやれ」

あまりにも低俗な要求に怒りが込み上げる。だが、静海には任務とともに貫くべき正義があつた。一瞬、唇を噛んだものの、女捜査官はすぐさま心を切り替える。

美女の手がドレスの裾に伸ばされ、パールピンクに煌く爪がスカート部分の生地を柔らかく摘つまんだ。静海は唇を少し舐めると、恥辱に堪えて言葉を絞り出す。

「お客様……カズミがどんな下着を穿いているかご覧下さい」

長い裾をたくし上げるわけにもいかず、左のスリットから右足側へとスカートを開いていく。美女の左足が、脛すねから膝にかけてゆつくりとあらわになる。彼女の太腿は艶かしい白光を帯びているが、その内側は深く陰影に閉ざされている。白と黒のコントラストに彩られた静海の媚脚に、王はかぶりつかんばかりに顔を寄せている。

恐らくは様々な女遊びを経験しているであろう王をして、静海のような美女が魅せ



る痴態は興奮に余りあるものだったのだろう。その眼が大きく見開かれていた。

「おお、これは……」

王の咽喉仏がぐびりと上下した。

彼の眼前で取り払われたスカートの内側に見えるのは、仄かな陰毛に飾られた乙女の陰部である。縮れの少ない陰毛がcaろうじて静海の秘裂にかぶさり、艶やかな恥叢は照明を反射して男を幻惑するかのように輝いている。

「これは確かに、とんだ好き者のようですな！」

文字通り舌なめずりをしながら王が言った。心の裡を怒りと恥辱に燃やしつつも、女捜査官は精一杯の媚笑を彼に向ける。

「カズミのあそこをご確認下さってありがとうございます」

そして、caろうじて慌ただしくない仕草でスカートを戻す。その裾を直す振りをしつつ、厚底サンダルのヒール部分に触れた。王が身を乗り出しているおかげで黒服からは確認が出来ない。

(自分で自分の首を絞めるといいわ。見ていなさい)

「ちよ、杉本さんっ、俺もっ」



眼鏡男が急に立ち上がった。杉本と王がうんざりした表情でちらりと視線を動かす。艶めいた熱を帯びていた部屋が、すつと現実に返るような感覚があった。

「なんぞ、坊」

面倒そうに杉本が口を開いた。明らかに格下の相手に対する口調である。杉本と王の視線を受けて、青年はおどおどとたじろいだ様子を見せた。

「いや、ええと、俺も……」

もごもごとそう言いながら、眼鏡男が上目遣いに杉本を見た。相手が誘ってくれるのを待つような、如何にも卑屈な仕草である。

「坊、お前にはわしらのような遊びはまだ早い。そこで見ておりやええ」

「そんな、俺は」

「それに、この女はお前にはちよいと高級ぞ」

「若、ここは御前のおっしゃる通り」

したり顔の王が頷いてみせる。へりくだった口調であるが、青年を侮っている様子は隠しきれていない。そんな男たちを前に、青年はまたも不貞腐れたような顔をしている。白け始めた室内の空気に、静海は少しばかり焦りを覚える。

（杉本たちが落ち着いちゃうとマズいわね）

彼らは遊びを切り上げて取引の密談を始めてしまいかも知れない。そうなればホステスである静海は人払いをされてしまう。だが、これは逆にチャンスでもある。

「あら、杉本様ったら、そんな冷たいことは仰らないで下さいまし」

静海は杉本の膝から立ち上がった。怪訝けげんそうな顔をする老人の耳元に唇を寄せる。彼の眼前にはドレスの胸元から覗く魅乳の峽谷がはつきりと映っているだろう。

「それよりも杉本様のおいたのせいで、ドレスを汚してしまいそうです。着替えて参りますから少しお待ち下さいな」

そう言つて、思わせぶりの仕草でスリットへと手を差し入れる。なまじ下世話なものと通じているだけに、杉本は都合よく解釈してくれたようだ。

「うはは、そうか。濡ぬらしてもうたか！ なら存分に拭いてこい」

「申し訳ありません。杉本様があまりにお上手ですのぞ」

再び脂下やにさがった様子を取り戻した杉本の耳たぶを、仕上げとばかりにぺろりと舐なめ上げる。そして、完全に上機嫌の老人に背を向けた静海は、テーブルを回つて眼鏡男のほうへと向かった。その手には盗聴器が隠されている。

「え、あ……」

もぐもぐとなにかを言いかける青年の前で腰を折り、彼のパーカの肩に腕を回す。

「お客様も、後で可愛がって下さいませね」

そして、彼がなにかを言う前に身体を翻し、扉の前で深々と頭を下げた。

「では、少しの間、外させて頂きます」

もちろん、静海がその部屋に入ることは二度となかった。

部屋を出た静海は、廊下の隅に立っていたタキシード姿の男に頷いてみせた。彼女をこの部屋まで案内した人物である。彼もまた捜査官の一員なのだ。

静海の仕込んだ盗聴器は、彼の操作によって作動する手はずである。この距離ならば、室内の盗聴器でも遠隔操作が可能なのだ。さらに、盗聴器から発信される音声を外部のスタッフが録音している。

「眼鏡のパーカのフードに入れたわ。回収よろしく」

あつさりそう告げたものの、静海の内心では男から受けた屈辱と不快感が渦巻いている。本当ならば、叫び出したいほどに悔しくもあつた。

（とにかく、これであの悪人にも正義は執行されるわ。もうあんな真似はうんざりだ  
けど）

そして、胸裏の苦々しさを振り払うかのように、静海は次の任務へと思いを馳せる

のだった。

三

「王の会社に立ち入り捜査が入ったというのは？」

広い執務室の中で、でっぷりと肥えた眼鏡の男が口を開いた。年のころは六十代を過ぎたあたりだろうか。脇に控えた彼の秘書がその問いに答える。

「はい。例の杉本議員からの情報リークと、傘下の企業の脱税ですね」

「杉本はどうした」

「入院して逃げるつもりなのですが、検察がずっと狙っていたようです。起訴は免れないでしょう」

「あの男には慎を任せようと思ったのに。情けない」

秘書の説明に、眼鏡の男は困ったような表情を浮かべた。皮膚の弛んだ顔の中で、眼だけがひどく冷たい。

「それにしても、杉本と王が同時にアゲられるというのは妙だな。調べておけ」

「はっ」

秘書が深く頭を垂れる。眼鏡の老人は苦々しい口調で呟いた。

「誰だか知らんが、詰まらない真似をしてくれる。ケジメを取らせねばな……」

「さてそこで、我々は彼女をカジノの景品としようと思っております」

「えっ……なにを言っているの!？」

思わず叫んだ静海の肩は高のごつい両手で押さえつけられた。青褪めた表情の静海にちらりと視線を送った龍が言葉が続ける。

「次の三十分で最もチップを稼がれたお客様の専属パニーガールとして彼女を提供致しましょう。皆様、存分に勝負をなさって下さい」

一瞬、フロアが静まり返る。だがすぐに怒号めいた男たちの歓声が耳を聳<sup>ろう</sup>せんばかりに響き渡った。あつという間に各種ギャンブルの卓が埋まっていく。

「専属ってどういうことですか！」

いままだが嘘のように静海の周囲から男の姿が消えていた。高に拘束されたまま静海は司馬老人に食ってかかる。

「専属は専属だよ。別にセックスをしろと言ってるわけじゃあない。ただお客をもてなしてやればいいだけだ」

ふつくらと艶のいい恵比寿顔の中で、細い眼だけが剣呑な光を帯びていた。そして、続いて彼の口から出た言葉に静海は戦慄する。

「お前はさつき媚薬のたつぷり入った飲み物を口にしたからのう。客をもてなすのはむしろ自分を満足させることにもなるのだぞ」

「媚薬ですって!？」

その言葉が、ついでしたがたの奇妙な肉体の高揚と自然に結び付いた。言われてみれば、以前にクラブでぼんぼん連中にドラッグを使われたときと似た感覚だったように思う。さつきから身体がやたらと汗ばむのも、もしかすると薬物による作用なのかも知れない。静海は視界が紅く染まるほどの怒りに声を震わせる。

「人をなんだと思ってるの!! なんて卑怯な真似を……っ!」

しかし静海のその言葉は最後まで続かなかった。

のんびりと近付いた老人の両手が彼女の乳房を驚づかみにしたのだ。高に押さえられた彼女はまるで抵抗が出来ず、その不埒な悪戯を許してしまふ。

「あっ! やめて……っくうっ、そんな、いやらしいっ、はふうんっ」

静海の理性は嫌悪を訴えるが、彼女の肉体はまるで異なる反応を示した。乳房から駆け抜ける電流めいた衝撃に、美女の魅腰が切なげに揺れる。

「お前にはいまから裏のカジノのバニーガールとしてたつぷり働いて貰う。こんなことで音を上げられては困るのう」

(このカジノで!! でもそれはつまり……)

この調子でいけば、あっさりと賭博行為のネタを上げることが出来るかも知れない。それを考えると、静海の理性からも抵抗力が薄れてしまう。

(でも、こんな裏社会の男にいいようにされるなんて)

司馬龍がどういう人物であるかは、警察組織における共通認識として静海の頭にも入っている。そんな男に肉体を弄ばれたうえ、薬物によるものとは言え興奮を覚えてしまう自分が許せない。しかし、老人の手がむにゅりと沈む彼女の乳膚は、間断なき肉刺激に反応して、すっかり桜色に染まっていた。

「あっ、駄目え、やめ……やめて下さいっ、くふうっ」

老人に揉み捏ねられる乳房は、カップの中でその先端を固く尖らせていた。敏感な肉豆が衣装とこすれるたびに、静海は甘い声を漏らしてしまう。

「よいよい。その調子でせいぜいお客を愉しませるのだぞ」

そう言った司馬龍の視線が動いた。荒い息を吐く静海は釣られてそちらを向く。

「最初はあの男のようなのう」

視線の先ではルーレットで大勝したらしき男がガッツポーズをしている。

どうやらその男が、静海の最初の客となるようだった。



「え、ええと、失礼します」

「はいはい。乗って乗って」

嫌悪感を押し殺して、静海はバニーのヒップを男の膝に乗せた。ちょうど、幼い子供が親の膝に座るように、相手に対して背中を向けるスタイルである。

ルーレットの勝者は三十代前半と思しき男だった。スカしたジャケットと山ほど着けたアクセサリーがどうにも浮いて見えるのは、彼がそうした装いに慣れていないからだろう。はしやぎかたにしても、どこか無理しているような様子である。

(たしかIT長者で有名な男だわ。誰かに連れられて来たんでしょね)

捜査官としての経験では、青年時代にひたすら学業に打ち込んでいた彼のような人間は、大人になってから知った遊びの世界に嵌まり込んでしまうことが多い。そうした弱点を突かれて、恐らく性質の悪い人間にこの船を紹介されたのだろう。とは言え、判断力を持った成人である彼自身が、この悪い遊びを愉しんでいるのは事実である。

(大の大人が簡単に下種<sup>げす</sup>な欲望に流されて、情けないことね)

「おおっ、尻の感覚最高じゃん！」

中年太りのだぶついた太腿が、静海の尻肉を包み込む。むき出しの太腿に感じる男の体温に嫌悪感が込み上げる。IT男は静海のウエストを抱えると、背後から彼女の項うなじに鼻面を押し付けてきた。淑女の艶やかな貴膚が中年の皮脂によってねっとり汚染される。女捜査官は男を振り払いたい衝動をぐっと抑え込んだ。

「よし。赤にベット」

「は、はい」

男の指示に合わせて卓上のチップを動かす。IT男は未だにルーレット卓に着いており、静海をアシスタントとして使っているのだ。当然ながら、同卓の連中は彼が静海を如何に調理するかを興味津々と言った様子で眺めている。その期待に応えるかのように、男の手が静海のウエスト上を移動する。ヘソの辺りを撫で回しつつ、さらに下方へと降りていく。それだけのことで、静海の肉体は熱い疼きを感じ始めていた。己が下腹部がずくずくと蠕動ぜんどうしているのが分かる。

「カズミちゃんは汗っかきさんなんだねえ。こんなに濡れてるよ」

「あつ！ ちよつと……やめて下さいっ！ 汗のことなんて、言わないでっ」

Vゾーンに指を這わせる男に、思わず強い言葉を返してしまふ。しかし、指摘された通り、スーツの生地が柔肌に食い込む境界部分は淑女の魅汗によってじっとりと濡れていた。さらに、皮膚に張り付く生地によって蒸れているだけでなく、静海の肉体はいまドラッグの作用によって発汗が促進されているのだ。

「違くないでしょ？ それとも別な液体で濡れ濡れかな？」

（拒絶の出来ない女を相手に、なんて下品な男だ！）

首筋にかかる男の鼻息がひどく不快だった。それが自分の肉体に触れることによる興奮であるとなればなおさらである。しかも、IT男の手のひらは股布を柔らかく膨らませた静海の陰部を撫で回しているのだ。時おり指の腹が彼女の肉裂に強く圧力をかけてくる。そのたびに女捜査官のヘソの奥はどくりと脈動して渴きを訴えた。勢い静海の呼吸は浅くなり、朱に染む頬が興奮の色を滲ませる。

「お客様、そこは、それ以上はっ」

「そこってのはここかなあ？」

「あはあっ、くうっ」

男の指がスーツ越しに秘肉を突き上げてきた。下腹部に響く熱い衝撃に、淑女の腰が跳ね上がる。IT男はさらに調子に乗った様子で、バニースーツの裾に指を差し込

んできた。外陰部に触れるかどうかの位置で蠢く指先は、静海の肉体を甘い期待で蕩けさせていく。すでに彼女は勝手に漏れる甘い声を抑えられなくなりつつあった。

「くっふう、ああ、そんな、お客様っ、んふううんっ」

「うっほ、この感触は、もしかして!!」

IT男が驚きの声を上げた。静海の下腹部を侵略する彼は、彼女に恥毛が存在しないことに気付いたのだ。生真面目な女捜査官は、どんな衣装を着ても構わないようにあらかじめ剃毛ていもうを施していたのである。しかし、いまはその努力が却って嘲弄の対象となってしまう。

「うおお、カズミちゃん、パイパンじゃん！ マジかよ！ 準備万端ってこと!!」

（わざわざ大きな声で言うな！）

「えっ！ 嘘だろ!!」

「ま、丸見えってことか!？」

同卓する男たちには驚いて席を立ってしまうものすらいた。静海はあまりの屈辱と羞恥に顔を紅く染めて俯うつむいてしまう。

「堪らないなあ、この感触！ 土手のぷにぷに感と、剃り痕のじよりった感じ！」

「はあうっ……そんな……そこばかり触らないで……あはあっ」

無防備極まりない様相の秘肉を嬲られ、女捜査官は可愛らしい声を上げてしまう。拒絶の言葉を紡ぐ一方で、彼女の下腹部はこれからIT男に施される淫戯に期待するかのように、甘い熱を湛えつつあった。

(マズい。このままでは本当にこの男に感じさせられてしまう)

ただでさえIT男の不遠慮な解説のせいで、静海は衆目を集めているのだ。だが、不埒な男の指先はいとも容易くバニーガールの陰部へと接触した。彼女の入り口は、陰毛が排除されたことで、剥きたてのゆで卵の如き柔軟性が生まれている。

「あつふう、直接なんて……!!」

「うはあ、カズミちゃんのマ●コ、すげえ柔らかくって……処女みたいだよ!」

はしゃいだ声とともに、男の中指に可憐な割れ目を割り開かれてしまう。淑女の慎重な陰門の甘美なる収縮を愉しむかの如く、男の指先は静海の内部へと入り込んでくる。自分の肉体に忌むべき存在が挿入される感触に、バニー捜査官は白い咽喉を仰け反らせて懊惱する。

「はくうっ、いけません、そんなに奥まで……ああんっ!」

首筋を伝い落ちる汗の珠の艶かしさもさることながら、バニースーツの股間で中年おやじの手がもぞもぞと動く官能的な光景を、観衆は固唾を呑んで見守っている。一

方、IT男は静海の粘膜に挿入した指をくりくりと回転させて、その甘い収斂しゅうれんを堪能していた。彼女の肉奥は男の指が蠢くたびに脈動を激しくしていく。そして、静海の肉体の変化にIT男がいち早く気付いた。

「お？ これはこれは、カズミちゃんたらこんなにしてたんだねえ」  
「な、なにを……」

彼女の言葉に答えぬまま、IT男の指先が膣内で大きく動いた。

くちゅくちゅつ！

「あつくううつ！」

小さな水音が響き、静海の上体がかくはんと痙攣けいれんした。秘部に湧いた蜜の音を恥らうと同時に、姫粘膜かきはんを攪拌する雄の動きにどうしようもない官能を覚えてしまう。

「いまの音って……」

「オマ●コの音だ！」

「あの女、濡らしてやがる」

静海の様子に耳目を集中していた男たちが囁き交わしている。自分の肉体の牝反応を知られたことに対する羞恥は、しかし彼女の奥で仄暗ほのぐらい情動となつて燃え上がった。新たな腺液が静海の肉奥より湧き出すと、IT男の指を濡らしていく。

「おやおや、まだまだ溢れてくるみたいだぞ。俺の指テクにめろめろかな？」

「それは……あんっ！ そんなことは、ふあっ……ありませんっ」

おどけた調子で卑俗な指摘をしてくる男に、気丈な淑女は媚声混じりの否定を返す。だが、その言葉の背後ではぴちよぴちよと彼女の牝肉が音を立てているのだ。

「すげえな。こんな場所で本気になっちゃうとは」

「ウサギは年中発情期ってやつだなあ」

観衆の声が嫌でも耳に届く。男の手の中で悶える美女は、牝の衝動に燃え上がる己が肉体を制御しきれない。IT男が指を動かすたびに彼女の肢体は肉悦を訴えるように大きく跳ねた。バニースーツの中で揺れ弾む乳鞆の先端では、鮮やかに色づいた乳首が痛々しいほどに隆起している。官能への煩悶をアピールするかの如く、静海の頭ではウサ耳のヘアバンドがゆさゆさと揺れていた。

「はあんっ！ お客様っ！ それ以上は……あはあんっ」

「これ以上されるとどうかなっちゃうかな？ カズミちゃんのエッチだねえ」

男の手が、静海の肉乳を力強く揉み絞り始める。しかし、拒絶の声を漏らす彼女には、そんな乳辱を撥ね退けるほどの力はなかった。調子に乗ったIT男は、さらに彼女の麗乳を玩弄する指先に力を込める。スーツのカップが歪み、辱めを受ける左乳が

こぼれ落ちてしまう。媚情に染まる薄桃色の肌と鮮紅に咲く勃起乳首とが衆目に晒さらされた。汗を浮かせて煌く乳肌は観衆を愉しませてやまない。

「ははは、カズミちゃん、大サービスだね」

「それは、お客様が、はふうつ、私の……」

あらわにされた乳房を恥らうよりも、いまなお陰唇をくすぐる指戯のほうが問題だった。いつの間にか中指と薬指の二指によつて淫技を施される性器からは、すでに腿肌を濡らすほどに愛液が漏れ出しているのだ。そして、肉蜜を流せば流すほどに、淑女の姫膣は飢餓感を覚える。二本の指では物足らないとばかりに、静海の腰が切なく揺さぶられた。自分の足の上で悶える女体にIT男が下卑た笑みを浮かべる。

「カズミちゃん、もしかして物足りないのかな？」

「あああ、なにを言つて……つくう、そんなこと、ありませんっ！」

気丈に言つてのける女捜査官の頭部に、男の左手が添えられた。肩越しに振り返つていた静海が驚いたように眼を見開く。

「えっ!! お客様さ……んむちゅう」

言いかけた美女の唇は、紫がかった中年男の唇によつて塞がれた。男の舌が唾液とともに彼女の口腔へと送り込まれる。



(こんな無理やりなキスなんて……)

任務の上とは言え、ほぼ無理強いに近い行為である。杉本に唇を捧げたときは、彼を陥れるという明確な目的が存在した。しかし、未だ初期段階に過ぎないこの状況で、ここまで女としての尊厳を蹂躪されるとなると、さすがの静海も屈辱に心が震えた。しかし、そんな理性の反応を裏切つて、彼女の肉体は粘膜同士の接触を謳歌するかの如く燃え上がっている。男の手が離れた乳房は肉刺激の再開を望むかのように微細に震え、未だ淫技の施される牝華からは新たな肉蜜が噴きこぼれる。

「あつ、ぬちゅ、はあんっ」

喘ぎつつ男の舌を受け容れる汗みずくの女体がうねり、甘い牝香を放出する。いまや観衆はギャンブルの行方も忘れて静海の痴態に見入っていた。官能に悶える美女の上下の唇を蹂躪しつつ、IT男は観客に向けて頷いてみせる。それは同じように肉欲を愛する男たちにのみ通じる無言の合図でもあった。

「お、おい」

「ああ……」

両隣にいた二人の男が、揺れ惑う女肉へと近付いてくる。首をねじつた静海は、その接近に気付きはするものの、淫技に支配された肉体ではなんの対応も出来ない。自

分の乳肉に彼らを取り付くのを、美女はその潤んだ瞳で見つめるのみである。

「んっちゅ、ああんっ！」

左乳を請け負った男は、静海の乳首に直接口を付けた。その生ぬるい感触は、新たな官能刺激となつて彼女の腰椎を甘く蕩げさせる。

「はあんっ、あつ、ちゅむう」

右乳へ襲いかかった男がカップの中から媚パニーの乳鞠を取り出した。しとどに牝汗をかいた静海の乳房が、室内の灯を反射して可憐に煌く。未だ直接の刺激を受けぬまま喜悅を欲するその豊肉に、男の指先が沈み込む。

「あふう、んうっ！」

「うおお、こんなに肉々しいパイオツは初めてだ……」

右の男は両の手それぞれを独立させて静海の乳肉を弄び始めた。片方の手は乳肌の球面を慈しみ、もう片方では指先を使って美女の繊細な乳首を觸るのだ。

（私の身体に、男たちが、下劣な連中が群がって……）

しかしそんな屈辱や憤りも、両乳をそれぞれ別の男に愛撫させる贅沢と、上下の牝唇を同時に攪拌される肉悦から生まれる快感によつて簡単に雲散してしまふ。静海の唇の端からは、男のものとは混じり合つた唾液が絶え間なく流れ落ち、彼女の肉肌に浮

いた汗へと溶け込んでいく。股間に開花する牝華は、いまやすっかり咲き綻んでおり、三本に増やされたIT男の指を咥え込んでいた。飽くまで控えめに鳴っていた水音は、いまや淑女にあるまじきボリュームで響き渡っている。

(こんなことをされているのに、私の身体は……このままでは駄目だわ！)

理性の鳴らす警鐘は、薬物によって増幅された性感によってあつという間に小さくなっていく。もはやかろうじて意識を保っているに過ぎない静海に対して、IT男はさらなる快楽を与えるべくその指先を動かした。

「あつむう……んっふう！」

彼女の膣口を蹂躪する指先は、その内部に畳み込まれた、女体において最も細密にして過敏な器官——クリトリスをほじくり出してしまった。如何に謹厳実直な女捜査官と言えども、己が肉体のどの部分がどんな反応を示すかは知っている。スーツの内で蒸れた空気がクリトリスをくすぐる感覚に、美女の柳腰が甘くよじれた。

(いまそんな場所を触られては……私は……！)

最後の理性が、逃げ出すように肉体へと指示を下す。だが、背後から抱かれた姿勢ではそれもままならない。さらにIT男は、決して美女を逃さないとばかりに彼女の陰唇に宛がった指に力を込める。その親指の腹が、静海の陰核を押しつぶした。

女捜査官の脊髄を性の快楽が電流の如く駆け抜ける。

「あっ……あっはああんっ！」

清楚な乙女とは思えぬほどの嬌声が、静海の咽喉からほとばしる。ぱんぱんに充血した乳首が、男たちを押し返さんばかりに勃起を逞しくする。そして、絶頂を迎えた彼女の陰唇からは放尿と見紛うばかりに大量の愛液が流れ落ちた。

（私、人前で、なんてことを……）

そして、静海の意識は白く明滅する喜びの大波へと溶け込んでいった。

## 七

静海が目覚めるとそこはベッドの上だった。

（いまはいつたい……私、どうして……!?!）

茫洋ぼうようとした意識は一瞬のうちに覚醒する。現状の分からぬまま、慌ててベッドから身を起こした。任務をまるで果たせていないこと、さらに自分の身元がバレてはいまいかという危惧、そしてなにより、男たちの手で性的絶頂を迎えてしまったこと。い

ちどきに押し寄せる思考の渦は恐れと不安を生み出した。

「ここって私の部屋じゃない」

視界に映るハンガーにかけられた服やスーツケースは、彼女自身がそこに置いたものである。誰かの手でここまで運ばれたというのだろうか。それに思い当たった静海は、慌ててかけられていた薄い毛布をめぐつた。果たしてベッドに横たわる彼女は未だバニースーツのままである。乾いた汗と唾液の匂い、そしてスーツの中で未だに蒸れている肌といった不快な要素が次々に皮膚感覚として甦る。

(まさか私、気を失ってからレイプされたりは……)

だが、スーツの状態と、なにより股間の感覚が挿入行為がなかったことを告げている。少なくとも、司馬龍が最初に宣言した言葉は真実だったようだ。未だ愛液のぬめりが残っているためか、陰部には湿った感触だけがある。

(でも、なんでわざわざこの部屋に)

視線を上げれば、時刻は未だ日の出前である。逆算すると一時間ほどしか意識を失ってはいないことになる。静海はどうにも収まりの悪い気分に襲われる。すると、ノックもなしに急に部屋の戸が開かれた。

「えっ」

「やあ。目覚めたようだね」

当然のような物腰で部屋に入ってきたのは、まさに司馬龍その人であった。ついさつきとは異なり、ポロシャツにチノーズというラフなスタイルである。

「あ、貴方はいったい」

「くつくつく、ついさつき挨拶した通り、この船のオーナーだよ。きちんと自己紹介させて貰おう。私は司馬龍というものだ」

芝居がかかった老人の言葉に、どう返したものか迷ってしまう。

「え、あの、私は……」

「ああ、いい、いい。知つているからな。そのまま楽にしてなさい」

口を開きかけた彼女を鷹揚な仕草で制した司馬は、まるで自分がこの部屋の主であるかのように、どっかりとベッドに腰を落ち着けてしまった。

(なんなのよ、この男は)

扇情的なパニー姿を隠すように、一度めくった布団でさりげなく身体を隠す。

「いや、さつきはよくやってくれた。ありがとう」

「はあ、仕事ですから」

違法な賭博に興じる男たちによって強制アクメを迎えさせられた屈辱がかすかに甦る。だが、静海はそれを飲み込んで、努めて平板に返事をした。すると、彼女の腰の辺りに座る司馬が、ねっとりとした視線を向けてきた。

「そこで一つ提案があるのだよ。君にとつても悪い話じゃあないはずだ」

「どういったことでしょう」

嫌な予感とともに緊張感が高まっていく。だが、捜査を遂行するためには、恐らく彼の提案とやらを受け容れねばならないだろう。

「ふむ。まあ、今晚のようにお客を愉しませてくれればいいのだ。別にバニーガールの格好でなくとも構わない。給料も弾もう」

「今晚のように、というのはつまり……」

「うん。まあそういうことだ」

客にその身を委ねよという意味である。当たり前のように口にしてしているが、信じられないほどに下種な要求だった。とは言え、それを断るとどうなるだろうか。

「もちろん、断ってくれて構わない。そのときは夜のカジノにも出なくていいよ」

「それは！」

夜のカジノというのは違法な賭場のことだろう。過剰な性接待が嫌ならば、それが

要求される場所では働かなくてよいという提案である。

（これからも男たちを相手に身体を開かなければならないというの？）

静海には果たすべき任務があるのだ。それを考えれば、選択肢はあるようであり、存在しないに等しい。彼女の捜査は違法賭博の現場に顔出しをしなければ進展などしないのだ。だがそれでも、賭博という犯罪行為に手を染める連中たちに身体を差し出すという行為は、静海にとっては苦痛だった。杉本やぼんぼんたちを相手にしたときのように、一回だけで終わるわけではないのだ。

「……分かりました。その話、お受けします」

しかし、葛藤の果てに、静海は頷いていた。その言葉に老人が相好を崩す。

（任務のため……なにより相手が司馬龍だもの。こうすることが正義への道だわ）

「そうかそうか。そりゃありがたい。じゃあ早速研修といこうかね」

「研修？」

思わず鸚鵡返しに答えた静海に、司馬龍がいきなりのしかかってきた。

「えっ！ なにを!？」



ベッドの上で上体を起こしただけの彼女は、呆気なく老人に組み伏せられてしまう。布団が剥ぎ取られ、バニーの装いが露わにされる。

「ちよつと！ なんですか！ なにをするんです！」

「だから研修だよ。さつきみたいに途中で気を失ったりされては困るからのう」

「それは、貴方が変な薬を使ったからでしょう！ 放して下さい」

抵抗する静海の両の手首を肥満老人は片手で握り込んだ。年齢を感じさせない司馬の膂力りよくりよくが、女捜査官に焦りと恐怖を抱かせる。拘束された静海の両手はそのまま頭上へと伸ばされた。汗の浮いた彼女の腋窩わくが室内灯に白く煌く。

「やはりほかの商売女とは違う、強さを持った女よの」

「くっ、なにを言って……」

老人の舌が、静海の首筋をべろりと舐め上げた。その不快極まりない感触は彼女の背筋に粟粒を生じさせる。老人の舌先はバニーガールの肌を滑ると、さらけ出された腋窩へと到達した。淑女にとつての秘すべき窪地が芋虫のような舌によつてべろべろと舐め回される。嫌悪感とは別に、くすぐったさのような感覚が肌に生まれ、静海は堪らず声を上げてしまう。

「いやあつ！ そんなところ、舐めたりしないで下さいっ！」

如何に怜悯な女捜査官とて、腋窩部は匂いがこもる箇所であり、皮膚感覚も鋭敏である。そんな部位を舐められることには、当然ながら抵抗感しかない。なによりも、かすかに感じるくすぐったさが、やがて快感に変わってしまうのではないかという恐怖があったのだ。それは、薬物による強制発情を経験しているがゆえの、静海にとつてのある種のトラウマとも言えた。

「君のような女性でも汗はかくものだな。こつてりとした塩味が効いているよ」  
「やめて！ そんなこと言わないでっ！」

あまりに直截な物言いは、クールな女傑をして悲鳴を上げさせた。恥ずかしさに心拍が上がり、どつと冷や汗が生じる。

「そうだ。その恥じらいだよ。プライドがあるがゆえに恥を知っているんだ」

嬉しそうにそう言った老人は、空いた片手を静海の乳房へと押し当てた。今日だけで何度目かも分からない乳姦の予感が、バニーガールを屈辱に震えさせる。

「そんなこと知りませんっ！ 手を放して下さいっしたら！」

睨みつける静海の視線を無視して、老人はカップの上から美女の乳肉の感触を確認するかの如く揉み始めた。

「ふむ、やはり極上の肉体よの。まずはわしが確認してしんぜよう」

(確認って、まるでもの扱いじゃない……)

老人の本質的な冷たさに触れたような気がして、背筋がぞくりとする。そしてそう思う間に、司馬龍の右手はスーツのカップの内部へと入り込んでしまった。すっきり汗に濡れた乳膚を脂っぽい指に握りつぶされる。一瞬の苦痛の後に、じんと身体の芯を痺れさせるような甘い感覚が駆け抜けた。

(いまの感覚って、まさかまだドラッグが抜けていないの!!)

そうでなければ、こんな下劣な男からの行為で快楽を得るなど考えられないだろう。その恐ろしい推測に、静海は無意識のうちに太腿を閉じ合わせていた。

「この乳豆の可愛らしい感触よ。まるで生娘のようだよ」

老人の指の間に挟まれた乳首がくりくりと捻ひねくり回される。意にすぐわぬ刺激の大き波にほんろう翻弄される繊細な乳器官は、瞬く間に勃起していく。指を押し返す淑女の媚突起の感触に、老人はその福々しい顔を綻ばせる。

「ほっほ、いいのう。たつぷりと塗ってやった甲斐があるというものよ」

「塗った……それ、どういう意味ですか」

ごく自然な調子で語られたおぞましい言葉に、脳髓が凍るような恐怖を覚えた。しかし、老人は静海の間いには答えずにその手を乳房から放してしまふ。そして、淑女

の媚汗に濡れた龍の手は下方へと移動していった。その動作から男の次なるターゲットを悟った静海は、必死で腿を閉じ合わせて腰を捻<sup>ひね</sup>った。

「それ以上はやめて下さい！ 本当に……駄目ですつたら」

もちろん、老人はそんな言葉に耳を貸さない。静海の想像通り、彼の指先はパニーガールの股間部、その柔らかき膨らみへと接触してしまう。ただそれだけのことで、美女はヘソの奥がどくんと跳ねるような昂りを覚えていた。

（この感じ、本当に薬物だわ！ 私の身体に、また……！ なんてことなの!!）

司馬が塗ったという「なにか」は、確実に女捜査官の体内で効果を現し始めていた。静海の脳裏にクラブでのぼんぼん連中による輪姦未遂の記憶が甦る。

（あのとぎ使われた薬!! あのクラブは中華企業が経営に参画するようになったと言っていたけれど、まさか司馬も関わっていたの!!）

だとすれば、薬物そのものが司馬由来のものなのかも知れない。断定は危険だが、そう考えるのがスムーズではないだろうか。

「ついさつき盛大にいきよったからか？ もうかなり解れておるのう」

「そつ、それは……薬のせいだから、私には関係ありません！ あふうっ！」

股間に触れていた老人の手が、生地の上から彼女の秘唇をぐいっと押し上げてきた。思わずこぼれた甘い叫びを必死で飲み込む。しかし、邪淫の老人はそんな美女の官能を掘り起こさんとばかりに、ハイレグの股間部をしつこく圧迫してくる。柔らかな外陰部を濡らす汗がびちゃびちゃと鳴るのが恥ずかしくて仕方ない。

「あつふ、ちよつと、そこ、触らないで下さい！」

腰をよじって逃げようとする静海は、その太腿を老人の両足によつてがちりと口ツクされてしまう。女体の抵抗を封じた司馬は、ついにスーツの生地の中へと指を差し入れてきた。汗で張り付いていた生地だが、一度その内側へ入られてしまうとその水分は逆に潤滑剤として作用するようになる。老いた痴漢の指先が自分の外陰部に接近してくる恐怖に、女捜査官はいいやいやと首を振りたくった。

「駄目えっ！ それ以上はやめてっ！」

「そう言っても、お前のここは……」

汗まみれの女体を押さえ込んだ司馬は、密やかに開口した淑女の肉門に指を這わせる。普段は飽くまでクールかつストイックな佇まいたたずの静海だったが、いまの彼女の陰唇はそんな姿とはまるで正反対の様相だった。

ぬちゅっ。

清楚な陰門は濡れた音を上げて老人の指を咥え込んだ。体内に現れた異性の存在感は美女の魅腰を甘くくねらせる。

「くっふう……駄目、指なんて、挿入<sup>い</sup>れないで……っはあっ！」

拒絶の言葉に甘い呼気を混ぜる女捜査官の肌が、あっという間に桃色に染まっいていく。彼女の肉体が喜びに蕩け始めた合図である。それを察した老人は、遠慮なしに静海の内部に己が指を挿入していく。丸っこく肥満した指に粘膜を拡張されたパニーガールは、咽喉を反らして随喜の嬌声を上げた。

「あっふうあっ！ 奥までそんなに……やめて、下さい……んふうう」

絶頂を経験しているがゆえに快楽を受け容れやすくなっている静海の肉体は、男の指に拡張されることで、甘く腰を砕けさせている。そのうえ、遠慮のない老人の指先は、IT男よりもさらに深くまで静海の肉体に押し入っていたのだ。

「ほっほう、キツく締め付けてきおる。これならお客も喜ぶだろうて」

「はふう、客なんて、私は、あくうっ」

司馬の指が静海の体内で大きく暴れ、はしたない水音が室内に響く。彼女の胎内からかき出された肉の蜜がスーツの外にまで溢れ出す。

「駄目えっ！ 本当に、そんな、それ以上しないでえっ！」

肉悦に弾む媚尻を伝った愛液が、ベッドに大きな染みを作っていた。肉唇に施される強制愛撫に、いまや静海は息も絶え絶えと言った様子である。そんな彼女の隙を狙ったかのように、老人の唇が吸い付いてきた。

「あつ、ちよ……んちゅぶ、はあつ、ちゅるっ」

襲い掛かる性悦に翻弄される美女は、簡単に老人のキスを受け容れてしまう。しどけなく開かれた彼女の唇を割って男の舌と唾液とが雪崩れ込んでくる。

(こんな男に唇まで奪われて、私は……)

汚辱のあまり理性が焼かれるようだった。しかし、上下の牝器官への肉責めを受けてなお、才媛の肉体は随喜に悶えている。小刻みに跳ねる女体と焦点の合わぬ瞳が、すでに淑女の理性が官能に押し流されていることを物語っていた。司馬は静海の舌を己が口腔に吸い込むと同時に、いままで触れずにいたクリトリスを指の腹で押しつぶした。電流の如き快感が、女捜査官の腰椎から頭骨へと駆け抜けた。

「ちゅむ……あつ、はふああんっ！」

呵責なき女肉侵略に、静海の背筋が大きく反り返った。カップからこぼれた乳房の先端から汗の滴が飛び散っていく。美女はこの日二度目の絶頂を迎えさせられたのだ。

「あ、はあ、はふう、あふうん」

唾液と汗で美貌を濡らした静海が、ベッドの上で荒く息を吐いた。弛緩しきつた彼女の肉体に抵抗する余力などなく、司馬の手による拘束もすでに解除されている。

「ふっふ、盛大にイったのう」

静海から身体を離れた老人は、彼女の分泌物によって盛大に濡れた手を眺めて満足そうに呟いた。そして彼は自分の着衣に手をかけた。

## 八

（私、また男の手で……）

絶頂の影響で意識がふわふわと落ち着かない。ようやく安定し始めた呼吸によって酸素が体内に取り込まれると、多少は思考能力が甦ってくる。

（どうにかして、逃げないと！）

慌てて身体を起こそうとした静海に、司馬の肥満した肉体がのしかかってきた。

「なっ、ちよつと、その格好はどういうことです！」

視界を埋めた老人は全裸だった。その股間で隆起する男根の威容に女捜査官は背筋に氷を押し当てられたような気分になる。彼が自分を強姦しようとしているのは疑い



ようもない。静海は本能的に露わになったバストを両手で隠した。

「ふほほ、わしのこれが気になるか」

静海の言葉をどう解釈したのか、老人は嬉しそうにペニスを跳ねさせた。その荒淫を物語るかのように黒光りする亀頭は、すでに先走りの汁を先端に頂いている。肉棒がしなつた勢いで、その汚らしい粘液がバニースーツに飛び散つた。

「やあつ！ そんな……そんなもの、しまつて下さいっ！」

眼前に迫る男根とともに、その強烈な欲望を見せ付けられた女捜査官が甲高い悲鳴を上げた。しかし、そんな牝贖の怯えは老人の獣欲を刺激するばかりである。

「はっはっは、そんなものとはひどい言い草だのう」

ベッドの頭部側にずり上がつて逃げる彼女を膝立ちになつた司馬が追い詰めにかか。未だ肉体に力が入らぬ彼女の太腿にその手が宛がわれた。

「さつ、触らないで……放してったら！ 人の身体にそんな、勝手な真似を！」

その美貌を恐怖に歪めた女捜査官の両足が、老人の手によつて大きく割り広げられた。バニースーツの股間が開かれ、美しい肌とそこにこびりついたまま汚らしく乾燥した腺液のコントラストが司馬の肉欲をさらに煽り立てる。新品とは言え、何度も男の手を受け容れた衣装は、そのタイトな構造を失いつつあつた。股間部の生地が伸び

てしまっているのだ。

「この服も弛んでちようどいい塩梅あんばいじゃあないか。お前のあそこ同じじゃって」

「いい塩梅もなにもないでしょう!! ふざけないでっ!」

愚劣な言葉を吐きつつ、老人の手がスーツの股間に伸びてくる。そして、閉じようとする静海の太腿を押さえたその手が、股布を横にずらしてしまった。

「きやあつ! やめっ……手を放しなさいよっ!」

下着を穿いていないために、静海の陰部はむき出しの状態である。悲鳴を上げる美女のその部分はふつくらと清楚に盛り上がり、その中央に儂げな縦線を刻んだだけの慎ましい佇まいだった。陰毛が剃り落とされているがゆえに、その幼い外観がより際立っている。

「おお、これは素晴らしい」

司馬はその立場ゆえに人並み外れた性体験を持っている。しかし、その彼をして静海の牝器官の様相は感嘆の声を洩らせしむるものだった。柔らかさとともに、その内部の緊密なる圧着感を想像した老人の男根は、まるで思春期の勃起の如く隆起を逞しくする。司馬はその儂げな脛裂に指を添えた。

「駄目、そんなところ、見ないでえっ……触らないでっ!」

その言葉を無視した老人は、美女の陰門をゆつくりと左右に開いた。

くちやつ、と音を立てて静海の粘膜が司馬の眼前に公開された。蛍光灯が白いベツドシートで反射するために、そのルビー色の姫腔の繊細なディテールが、眼鏡のレンズ越しに男の網膜にはつきりと焼き付けられた。

(じつくりと見てる……見られてる……)

ねつとりと蜜のまぶされた肉褻が幾重にも畳み込まれた腔粘膜は、甘く解れた大陰唇とは対照的に、その内部でびつたりと閉ざされている。それは彼女自身の謹厳な性格を現しているようでもあり、その奥に男根を打ち込まれる瞬間を期待しているようでもあった。獲物を前にした老人は、じりじりと膝立ちで彼女ににじり寄っていく。振り返ったペニスから溢れるカウパーがだらだらとシートに滴り落ちていた。

(あの男根を、私に挿入しようとしているの!!)

福々しい顔立ちの老人の瞳が眼鏡の奥で肉欲を滾らせている。獣じみた男性の本能を見せ付けられた静海の思考は一瞬のうちに恐怖の色に染め上げられた。あまりに冷たい恐怖感に、美女は堪らずベッドから飛び出そうとする。

「駄目だあつ」

「きゃあつ」

だが、驚嘆すべき素早さの老人は彼女の両足を己が膝で押さえ込んでしまった。静海は上半身をひねっただけの格好でその逃亡を封じられた。自分を押し返そうとする彼女の手などまるで意に介さず、司馬はその肥満体をずり上げてくる。

「やめ……やめてっ！ 近寄らないでっ！」

一歩また一歩と女体の入り口へと接近する肉棒に、静海は恐怖の悲鳴を上げる。しかし、狭いベッドの上では逃げることも出来ず、弛緩の消えぬ肉体では暴力的な抵抗も不可能だった。ぼたぼたと汚液を滴らせる肉棒が、牝華へと肉迫し——  
くちより。

「あうっ」

司馬の肉棒が静海の秘唇へと接触した。嫌悪と恐怖感が彼女の脊髄を駆け抜ける。だが、そんな感情的な反応とは逆に、美女の肉体はようやく訪れた男根に歓喜して甘く震えるのだ。

（葉の影響とはいえ、こんな屈辱……こんな、惨めな……！）

「おお、堪らんのお。柔らかさも温かさも、よう解れておるわ」

自分を見下ろす司馬の、脂に汚れた眼鏡を睨み返す。しかし、如何にも彼女らしい勝気なその表情は陵辱者を余計に喜ばせてしまう。

「くつくつく、いいのう。その顔をよがり泣きさせてやるからのう」

「ふざけるな！ 私がそんな……はあんっ！ ああふあっ！」

すつかり愛液で潤んだ外陰部に、老人の亀頭がにゆるりと押し入ってきた。ぱんぱんに張り詰めたその先端が静海の入りに口にあめこまれた瞬間、彼女の口からは甲高い媚声が洩れてしまう。脳内に発生した桃色の霧が、あつという間に嫌悪と恐怖を覆い隠した。女捜査官の美麗巨乳は、内包した官能を体現するかのように張り出す。その先端では乳首が汗をまといつて隆々と勃起している。

「ああっ、駄目、駄目えっ！」

必死で司馬の身体を押し返そうとする美女の瞳が涙に曇る。こんな下種な男に蹂躪されようとしているのに、肉体が性的な反応を示してしまうのが悔しくて仕方がなかった。彼女の陰唇は興奮の汁すら垂らしている。

（情けない！ こんな男に辱めを受けているというのに！）

「ふほほ、やはりキツイ！ こりゃあ大した名器よのう！」

老人のはしゃいだ声が男根を経由して静海の下腹部に重く響く。ごろりとした亀頭が肉体に打ち込まれる感覚がめりめりと骨盤の中で反響する。

（私の膣内で、こいつのペニスが……）

閉ざされた肉褻が一枚一枚剥離していく感覚は静海の額に大粒の脂汗を生じさせていた。嫌悪や快感や緊張がない交ぜとなって彼女の下腹部を激しく揺さぶる。それはやがて腔粘膜の収縮という形で司馬の男根へと還元された。

「きゆうきゆうと締め付けよるわ！ この好き者が！」

静海の肉奥が如何に緊密に閉ざされているといえども、溢れる愛液によって男根との軋轢あつれきは皆無である。むしろ司馬にとっては彼女の腔肉を開拓する満足感をもたらすものでしかない。腔内を遡上する肉棒に自分の身体が割り開かれていく感覚に、気高き女捜査官は甘い嬌声を抑えきれない。

「くううつ、駄目え、本当に、あつふう、駄目えっ！」

彼女の悲鳴に合わせて肉褻が収縮し、闖入者を歓待する。そんな牝反応に励まされたかの如く司馬の男根が張り詰める。限界まで勃起を極めた老人はついに我慢の限界とばかりに、その贅肉を弛ませた尻を淑女に向けて押し込み始める。

「あふうっ！ そんな、はああんっ！」

「よいぞ、その反応……おお、この感覚、まさか」

心地よい挿入感に笑み崩れていた司馬の顔が一瞬怪訝に歪められた。そして静海は、これまであえて触れずにいた自分の肉体の秘事を悟られたことに気付く。

「ほほう、もしやとは思うたが、本当に生娘だったか」

「くっ、貴方には関係ない」

「いやいや、無関係などときびしいことを言うでない。お前の両親の事故では、私も東奔西走したのだからな、芹澤静海よ」

老人の言葉は、快樂に煙っていた静海の思考を一瞬でクリアにした。

「両親って、いったいどういう意味!! それに、私の名前!」

「くくっ、あの事故の犯人はとある代議士の息子でな……おお、ぷりぷりと弾力のあ  
るいい処女膜よのう。いまから私が突き破ってやるからな。くくくく」

「な、なんですって!」

快樂によつて流していた脂汗はいつしか緊張と興奮による発汗に変わっていた。

「その代議士の息子を海外に逃がして、代わりに中国から出稼ぎに来ていた若者を犯人に仕立てたのが私だよ。それがお前と結び付いたのはつい最近のことだがな」

「そんな、なんてこと……あなたが……あなたが私の両親をつ!」

ずつと追い求めてきた真実をこんな状況で知ることになるとは思ってもいなかった。  
愕然とする静海の様子に、真の黒幕たる華僑は暗い笑みを浮かべる。

「それにしても、お前のその反応を見ながら処女を頂けるとは長生きはするものよ」

「あなたにそんな真似なんて……あつ、やあつ、駄目え！」

静海の体内で、一気に司馬の存在が膨らむ。横隔膜がせり上がるような圧迫感とともに、来るべき最終挿入を予感した彼女の子宮が甘い飢餓感を訴える。肉棒を押し込まれた処女膜が張り詰める感覚が走り、乙女が最後の嬌声を上げた。

「やめてえ！ あなたなんか、処女を奪われるなんて……あつはああんっ！」

悲鳴をかき消すような衝撃が、静海の処女膜を駆け抜けた。

「駄目ええっ！ いやああっ！」

絶叫とともに、静海の背筋が弓なりに反り返る。膣奥まで挿入を施された彼女の膣粘膜は急速に収縮し、男根を食い締めた。同時に、破瓜を遂げた子宮はその犯人である肉棒を愛しむかのように子宮頸管粘液を分泌し始める。処女喪失の証である血筋とともに、艶やかな愛液が二人の結合部から流れ落ちた。

（そんな……私の膣内に、司馬龍……犯罪者のペニス……熱くて、固いものが挿入はいって……びくびく動いてる！）

複雑極まる感情に翻弄される静海とは対照的に、老人はご機嫌な様子である。



「やはり極上の挿入感よ！ それにしても下手な客を宛がわんで正解だったのう」

そして、根元まで挿入された男根の動きが止まった。美女の初腔の愛らしい肉反応を愉しむためである。

「感謝をするがいい。私のおかげで保険金も入って、いまの立場を得て、そしてこうやって女にされたのだからな。ふっはっは」

「勝手なことを……あはあんっ！」

憎憎しげに司馬を睨みつけた静海の美貌が甘く蕩けた。老人が腰を大きく引いたのだ。丸々と怒張した亀頭が、開拓されたばかりの美女の腔洞を逆流した。その快美な排出感に、女捜査官は艶めいた声を洩らしてしまう。それと同時に、ようやく挿入欲求を満たされた彼女の子宮は、肉棒の喪失を恐れるかの如く、腔粘膜を収縮させて男を引き留めんとする。

「ふははっ、私のペニスがよほど恋しいと見えるな」

「くう、そんなこと、あるわけがないっ」

陵辱者のあまりに凶々しい物言いを、食い縛った齒の間から否定する。しかし、そんな反応は、再び男根が挿入されることで一変する。

「ああっ、駄目、あはあんっ！」

肉棒が引き抜かれるとともに閉じ合わさった肉襷が、二度目の挿入によって再び割り開かれる。雄槍の帰還を寿ぐかのよう<sup>こしほ</sup>に美女の子宮は蠕動し、微細な腔内突起を総動員して老人の肉棒を接待した。

「おお、大したマ●コよの、初めてのセックスでここまで反応するとは」

「やめて！ あうっ、そんなこと、はあんっ！ 言わないでっ」

親の仇<sup>かたき</sup>とも呼べる存在であり、最も正義による断罪を下したかった人物に犯されて牝の反応をしている自分がひどく悲しかった。しかし、そんな彼女の理性を消し飛ばさんとばかりに司馬は腰を使い始めた。

粘膜の交接による水音がじゅぷじゅぷと鳴り響く。

「ああんっ！ やめて、動かないで、くふうっ！」

引き抜かれる亀頭にこそがれた腔壁から響く快感。突き上げられた肉棒に腔孔を埋め尽くされる充足感。さらに、性経験豊富な老人は角度を変えた挿入を行うことで、決して静海の性感を飽きさせないのだ。

「はっふう、駄目、そんな……ああんっ！」

薬物によって官能のたがを外された美女の肉体は、次は如何なる挿入が行われるのかを待ち侘び始めていた。そして、その期待に応えるべく挿入される男根を慰撫する

かのように、いつしか彼女の腰はゆつくりと前後し始めていたのだ。

「ふっふっふ、そんなに私のペニスがいいかね。腰まで振りおって」

「そんなことはないっ！ くううっ、ふざけるなっ！」

叫んだ静海は強靱な意志で腰の動きを抑え込む。

「ほう、そんなことはないと本当に言えるかな」

司馬の細い眼がレンズの奥で細められた。そして老人は、静海の膣を犯す腰の動きを止めてしまったのだ。ちょうど大陰唇に亀頭が嵌まっただけの状態である。

（えっ、なによ……終わったの？）

静海の理性はつかの間の休息を喜んだ。しかし、停止した時間が過ぎるにつれ、彼女の子宮が飢餓感を訴え始める。いままで膣内をたっぷりと満たしていた存在が消えたことへの喪失感と焦燥感が、淑女の骨盤の内側で加速度的に肥大していく。

（なによ、この感覚は）

いまのいままで処女だった彼女にとっては初めての感覚だった。そして、静海の肉体の戸惑いに応えるかのように、司馬の肉棒がわずかに動いたのだ。

ぬちゅっ！

「あはぁんっ」



かすかな水音にかぶせるように静海は媚声を上げていた。途端に、軽く挿入されただけの肉棒の存在が強く意識させられてしまう。愛しい肉棒を膣奥へと引きずり込まんとばかりに外陰部が波打ち始める。しかし、それでも司馬は動こうとしない。

（またなの!? いったい、どういうつもりなのよ!）

ほんの少しだけの挿入が、逆に挿入欲求を盛大に煽る。謹厳な女捜査官の肢体に焦燥の汗が浮かび始めた。狂おしいほどに静海の子宮は男根を渴望している。

「あつ、つくう、はふう……」

荒い息を吐く女捜査官の腰がもじもじと揺さぶられた。半端に挿入された男根を軸にして、魅惑が緩やかに円運動を開始する。

「はう、ああつ……こんなこと、くうつ、私は……」

女捜査官は必死の理性によつて、自分の牝反応を制止する。だが、それは一瞬のことに過ぎなかった。

じゅぶうつ!

「はふううんっ!」

膣内に生じた飢餓感に苛まれるままに、淑女は自ら腰をせり上げて老人の肉端子を飲み込んでいた。満足げな媚声とともに、契りあう男女の交合部から噴水のように愛

液がこぼれていく。すでに破瓜血は淫水によって洗い流されており、かろうじて赤褐色の染みがシーツに痕跡を残すばかりである。

「あつくう、私、私の身体……ふはあんっ」

官能に染まった美貌の中で、静海の瞳だけが哀しみに濡れていた。しかし、彼女の肉体は理性を無視して動き始める。

「それでよい。女は男に奉仕するのがあるべき姿なのだ」

（こんな犯罪者に辱めを受けて……私も、私の両親も……絶対に、許さないわ）

胸に浮かぶのは憎悪と屈辱だった。しかし、そんな黒い感情も子宮の訴える随喜に押し流されつつあった。下半身に広がる快楽の波動に、胸の奥まで熱くなる。さらに、彼女の麗乳の先端に咲いた勃起乳首が老人に摘まれてしまったのだ。

「きゃあんっ！ 駄目え！」

甘い艶声を上げる彼女を追い詰めんとばかりに、老人の指は乳首をひねり回す。ぎりぎりですら苦痛にならない乳刺激が、静海の肉体に走る官能をより大きくする。牝肉を満たされたうえに乳首を玩弄される快感は女捜査官の子宮を切なく悶えさせる。

（駄目よ、これじゃまた失神しちゃう！ こんな男に……犯罪者に！）

憎むべき相手に絶頂を迎えさせられる。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**